

笹川記念保健協力財団 日中交流事業
中国医科大学での神経内科学交流報告書

秋田県立脳血管研究センター
神経内科研究部長 長田 乾

2011年6月18日より21日まで中国瀋陽市、中国医科大学第一医院を訪問し、神経内科学についての講義、患者診察および意見交換を行った。

6月18日秋田空港より羽田空港に到着し、翌19日成田空港より出発し、午後瀋陽空港に到着した。20日朝には中国医科大学神経内科の何志又主任教授および王軍教授と脳卒中医療の現状などについて意見交換を行った。中国医科大学には、現在1学年600余名の医学生が在籍し、大多数の学生は中国語で教育を受けているが、優秀な100名は英語或いは日本語の教科書で医学教育を受けており、日本に留学経験のある中国人医師は全員日本語コースの卒業生であった。また、中国医科大学は、遠隔地や農村部で就労する医師の卒後教育にも力を入れており、我が国からの支援を得て、遠隔地や農村部で働く若い医師たちを数か月単位で中国医科大学に国内留学させてスキルアップさせるプログラムを展開していた。



中国医科大学第一医院神経内科において、2回の講義を行った。最初は、「脳卒中と認知症の画像診断」と云うテーマで、脳血管の解剖学から脳エネルギー代謝、脳虚血の病態、ポジトロンCTなどの最新の画像診断について約90分間、日本語で講義を行った。中国医科大学には既にポジトロンCTが導入されているものの、専ら悪性腫瘍に診断に利用されるのみで、脳卒中や認知症の病態検索には用いられていないことから、今後は我が国との共同研究などにより臨床応用を拡大する構想など何志又主任教授が抱負を述べた。

さらに「脳卒中の危険因子管理と再発予防」と云うテーマで、秋田県立脳血管研究センターで行われている秋田県脳卒中発症登録（疫学研究）や一過性脳虚血発作・急性脳血管症候群の最新の考え方、大規模臨床試験結果の解釈などについて約90分間の講義を行った。国立生理学研究所に留学経験があり日本語が堪能な王先生が私の日本語の講義を中国語に同時通訳しながら講義を進めて、講義終了後には質疑応答を行い、神経内科スタッフや研修医の質問に答えた。

その後に入院中の2症例の診察を行い、神経症状の見方、画像診断の読影、臨床診断などについて日本語で解説した。自治医科大学に留学経験のある欧陽先生が同時通訳を行った。1例目は運動ニューロン疾患を合併した前頭側頭型認知症、2例目は症候性てんかんと診断された。

講義終了後は、何志又主任教授の案内で中国医科大学第一医院神経内科外来、要人外来、神経内科病棟、脳卒中診療ユニットなどを視察した。脳卒中診療ユニットではMRIやSPECTを駆使した画像診断を取り入れた最新の診療体制



が機能していた。夕方には、中国医科大学国際交流局長の潘伯臣教授および劉佳先生と意見交換を行った。潘伯臣教授は日本とアメリカの両国に留学経験があり、留学生の海外派遣や国際共同研究などを積極的に推進しておられた。



6月21日に瀋陽を発ち成田空港、羽田空港を經由し秋田に戻った。

短期間の滞在であったが、講義や患者診察を通して、我が国における最新の医療情報や臨床研究の現状を中国の研究者や若手医師に伝えることができた。

また日本留学から帰国した中国の医師達が、現在指導医或いは中堅医師として活躍し、中国の先端医療や医学教育を支えていることを垣間見ることができた。さらに、日本に留学経験のある教授や教育スタッフと意見交換を行った中で、中国医科大学神経内科の初代の主任教授の李文中先生が中国医科大学退職後に来日して秋田県立脳血管研究センターに研究員として暫く在籍したことや、何志又主任教授が弘前大学医学部に留学経験があり、私も弘前大学出身であることなど多くの共通の話題があり、さらに親交を深めることができた。このような機会を賜った笹川記念保健協力財団に深く感謝する。

2011年8月13日記